



# お多賀さん

多賀大社  
禰宜 藤村 滋

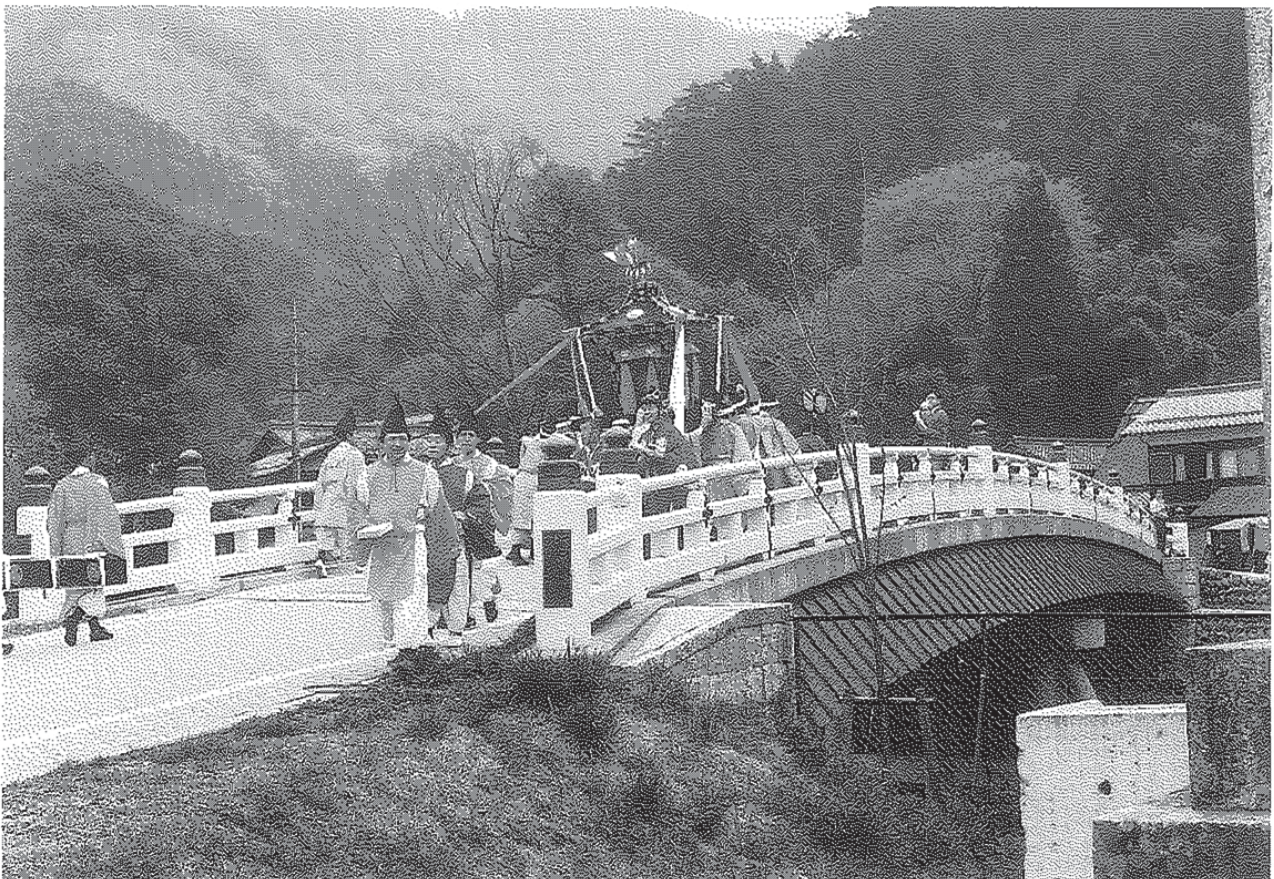
## 1. イザナギ、イザナミご鎮座の話し

「お伊勢七度 熊野へ三度 お多賀さまへは月まいり」と多くの人々に親しまれています。多賀大社は伊邪那岐命いざなぎのみこと（男神）伊邪那美命いざなみのみこと（女神）のご夫婦の神さまをお祀りしています。

和銅5年（712）に完成しました『古事記』の神話をみますと、このご夫婦の神さまは力を合わせて日本の国や自然の山川草木あらゆる物をお産みになられたと記され、このことから「万物の生命いのちの神さま」として昔から多くの人々に信仰されてきました。私達人間は

もちろん、動物また草や木にも「生命いのち」があることはご承知の通りです。花の種をまき水や肥料を施し、一週間もすると芽が出ます。その後二葉が本葉になり段々と大きくなります。このように植物が成長することは我々現代の人々にとっては至極当然のことのようではありますが、古代人にとっては大変不思議なことであったと思われます。

古代の人々は野に咲く一輪の草花にも、山々の一本の木にも私達人間と同じように「生命」のあることを認めています。古代人



遠方の山が杉坂山

の暮しは自然現象が大きく左右します。日照りが続くと稲が枯れ、また雨が降り続くと稲が流れこのことは生死に大きくかわってきます。ですから自然の恩恵に対する感謝の気持ち、反対に自然の怖さも充分に知っていました。

日本全国に約八万の神社があります。そのほとんどが自然の神様を祀った神社で、この事を物語っています。先に述べた『古事記』に「伊邪那岐大神は淡海の多賀に坐す」と書かれてい

ますので、多賀大社が今の所にご鎮座になられたのは古事記完成以前と言えます。昔から多賀地方にはイザナギ、イザナミの二柱の神は天から近くの杉坂山に降られ麓の栗栖の里にしばらくお留りになられたと伝えられています。そのお留りになられた所が今もお祀りされている調宮神社です。

このイザナギ、イザナミの二柱が杉坂山にお降りになられたと言われる伝説は神様が何処から来られるのか、また神社がどのようにして祀られたのか等古代人の考え方を伺うことができます。

古代人は神様は山から、また山に降った雨が谷に谷から川へ、川から水田に来て私達に豊かな稔りをもたらしてくれるものと考えていました。何故なら日本中で行われている神社の豊作を祈る春祭り、それに対する感謝の秋祭りがそのことを語ってくれています。

## 2. 犬上郡の鎮守さま

奈良時代から鎌倉時代にかけての多賀大社は犬上郡（明治までは現在の彦根市も含まれていた）の氏神さまとして信仰されていました。このことは先に述べたように杉坂山に降った雨が芹川になって豊かな水を流域の人達、つまり犬上郡の村々に供給してくれました。現在のように数多くの産業や、働く所があっ



夕日神事の「御樋」

たわけでなく農耕生活が全てであった時代には自然現象によって生活が左右されたのです。稲作技術もなく豊かな稔りをもたらす肥料もなく農機具のない当時にあっては、ただ一生懸命天に祈るだけでした。このような日常生活にあって人々の心のささえになっていたのが「お多賀さん」であり、犬上郡全ての人達によって崇敬されていたのです。

このことを物語る一つの資料を紹介します。

古社である多賀大社には江戸時代中頃までは多くのご神宝や今実在していれば重要文化財にも指定されるような物件、又は、ご神宝が沢山ありました。安永2年（1773）惜しくも大火にあい、そのほとんどが灰と化してしまいましたが、残存しているその一つに「御樋」と言ってお神宝としてご本殿に納められています。これは字が示すように皆さんがご承知の水を流す「樋」のことです。

この「樋」は木製のものです。稲作で最も大切なことは水利です。昔から水の問題で争いが絶えないのが常でした。この水田に水を平等に分配する為にこの樋が使用されました。また、この樋を勝手に使用しないように多賀大社が厳重に保管していたものと思われます。何時の時代にも水は貴重なものであり「神聖」なものでなければなりません。

世界には水不足で穀物、野菜が取れず、またある地域では飲水もなく困っている国々がたくさん有る中で、私達の日本は春夏秋冬の四季が明確に分り山々の緑が多く、なんと水の豊富な自然に恵まれた国であることに感謝しなければならぬと思います。

地球上の命ある物全ての「生命」の源である水は普段は無意識に浪費しているのですが、限りある資源をもっと大切にしなければなりません。自然は人間の為にあるのではなく地球上全ての生き物の為にあるのです。

今私達はそのことにあまり関心がないように思われます。環境問題や水資源の問題も地球規模から議論されなければならぬと思います。清らかな水は私達人間にとっても大事な「生命」の根源なのです。

「御樋」のことからもわかるように犬上郡内の人々にとっては多賀大社の存在は精神的なささえのみならず現実的な大きな役割をも果たしていたのです。

御樋は4月22日多賀まつりの最終神事である「夕日の神事」には本殿から持ち出され「御樋拝戴」と言って、多賀まつりに参加した全ての人が御樋でお祓いを受けます。

このことは新たな気持ちで明日から仕事に

従事することを願ったものです。日本には数多くの神社がありますが、このように水を分配する「樋」が神社の御社宝となっているのは大変めずらしいことと思われます。

### 3. 多賀信仰の広まり

前項で述べたように犬上郡の氏神様であったのがなぜ日本全国津々浦々まで名を知られるようになったのでしょうか。

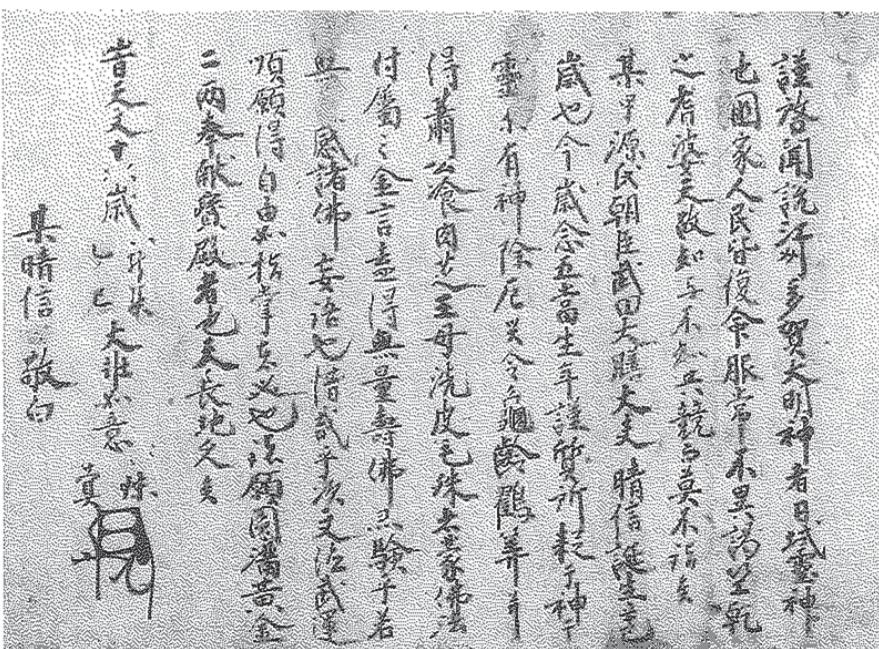
敏満寺の地は早くより開け、聖武天皇の天平勝宝3年(751)奈良に東大寺の大仏殿が建てられる頃に書かれた東大寺領の荘園絵図に「水沼村」として出ており東大寺の料田となっていました。

多賀大社から南へ約1kmの所に敏満寺の集落があり、そこには江戸時代に多賀大社の奥之宮と言われていた胡宮神社があります。また、中世には敏満寺といわれるように数多くの塔頭が存在していたと言われていいます。多賀信仰の広まりは神仏習合によって成就されたと言えます。

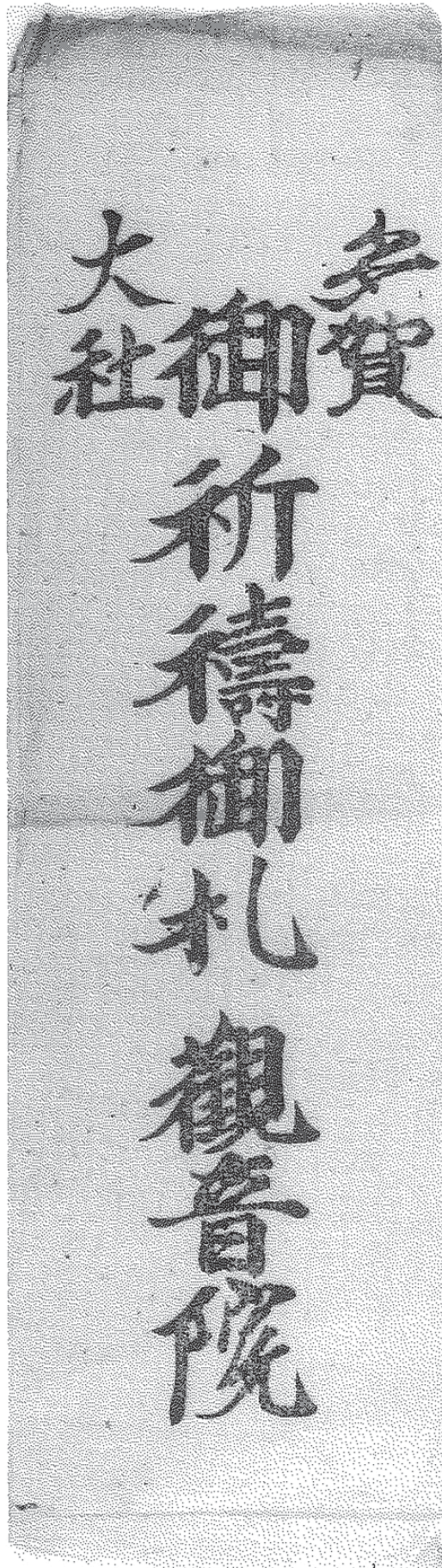
我国固有の神道信仰と大陸から渡来した仏教との融合した信仰であってその萌芽は奈良時代に現われます。6世紀に仏教が渡来しましたが、本来は個人の救済を主とする仏教も日本に入ると敬神尊皇、国家の安泰を主とする

日本文化に同化し神道と仏教が相並行して信仰せられたのであります。

文化の改新と共に仏教は勢力を増し朝廷は勿論、社会にも大きな影響を及ぼし奈良時代の後期には東大寺の建立に際しての宇佐八幡宮の託宣、伊勢神宮を始め越前の気比神宮、鹿嶋神宮、住吉大社、伊勢の多度大社などにも堂塔を建てたり読経勤行する施設、つまり神の為の仏法を修する神宮寺が各地に創建されました。



武田信玄祈願文 天文14年(1545)2月吉日



坊人配札の御神符(江戸時代)40.8×11.2

仏教が栄えるに従って堂塔も次第に建立されたとみえて胡宮神社の文書で元徳3年(1331)『注進当時堂塔鎮守目録所』を見ると本堂をはじめ如法堂、観音堂、鐘楼等の堂塔が南谷、西谷、尾上谷の三方に分かれ、一山で40余坊もあり、神社は木宮両宮、新熊野十二所、白山権現、天満天神等の社名が見え、この中で木宮両宮と言うのが胡宮神社であります。このように隆昌を誇っていた胡宮神社も元亀元年(1570)浅井長政の兵火によって敏満寺の堂舎僧坊が焼失し、その後復興することなく退転しました。

明応3年(1494)不動院が開基して逐次進んでいた多賀大社の神仏習合も敏満寺の焼失を機に急速に進み般若院・成就院・観音院が建立され一応の形態が整いました。それにつれ各院は僧と共に多賀大社の「お神札」を信者に配札したり、勧進で諸国を廻り多賀信仰を弘布する「坊人」が多く所属していました。

坊人は伊勢神宮の「お神札」を全国に配布した「御師」と同じものでその多くは修験者でありました。当社が所蔵する天文14年(1545)2月吉日の『武田信玄祈願文』は信玄が25歳厄年に当たり長寿と文徳武運を祈るものでありますが、当時既に甲斐国まで当社が寿命長久の神であるということが知られていたものと思われます。また、同時に甲斐国まで坊人が勧進や配札活動に出向いていたことの証左の一つであります。

天正7年(1579)『木曾義昌公朱印状写』を見ると不動院の坊人が木曾福島藩の領内に於ての往来に伝馬の便宜まで与えられ優遇されています。

このように領主の許しを得て次々と諸国を廻り多賀信仰を拡大していきました。先に述べたように修験者でもある坊人は諸国を廻ることによって最新の情報を得る事ができました。戦国時代にあつては諸国の武将にとっては坊人の提供する情報は政治的にも戦略的にも価値ある情報であったと思われます。

天正3年(1575)『織田信長朱印状写』では高野山の「高野聖」の諸国への勸進活動は禁止しているけれども、当社坊人の勸進廻りの自由を認めたもので信長は当社の坊人に対しては随分好意的であった事がわかります。記録によると江戸期にはこのような坊人が約100名余り存在していました。坊人達はそのほとんどが甲賀、甲南に住居を構え、それぞれ担当の国が決まっており、他人がその諸国を廻ることはありません。また自分の担当の諸国から信者を引率して多賀参りの道案内もしていたのであります。

#### 4. 多賀講の結成

坊人の勸進、または配札活動によって各地に多くの信者や崇敬者を得ることができました。その信仰圏は天明2年(1782)『諸国人数改帳』を見ると五畿の大和国(奈良)、山城国(京都)、河内国、摂津国、和泉国(大阪)を始め、東海道では伊勢国、伊賀国(三重)、尾張国、三河国(愛知)、伊豆国、駿河国、遠江国(静岡)、甲斐国(山梨)、東山道では美濃国(岐阜)、信濃国(長野)、武蔵国(東京・埼玉)、上野国(群馬)、北陸道では若狭国、越前国(福井)、越後国(新潟)、山陽道では播磨国(兵庫)、美作国、備前国、備中国(岡山)、備後国、安芸国(広島)、山陰道では丹波国、丹後国(京都)、但馬国(兵庫)、因幡国、伯耆国(鳥取)、南海道では紀伊国(和歌山)、伊予国(愛媛)等広範囲に及んでいることが明らかにわかります。

今日のように車社会であってもこのような遠方まで出かけるのは苦勞を要します。まして江戸時代のことですから山を越え、谷を越え何ヵ月もかけて廻ったものと思われます。命がけの旅であったことでしょう。

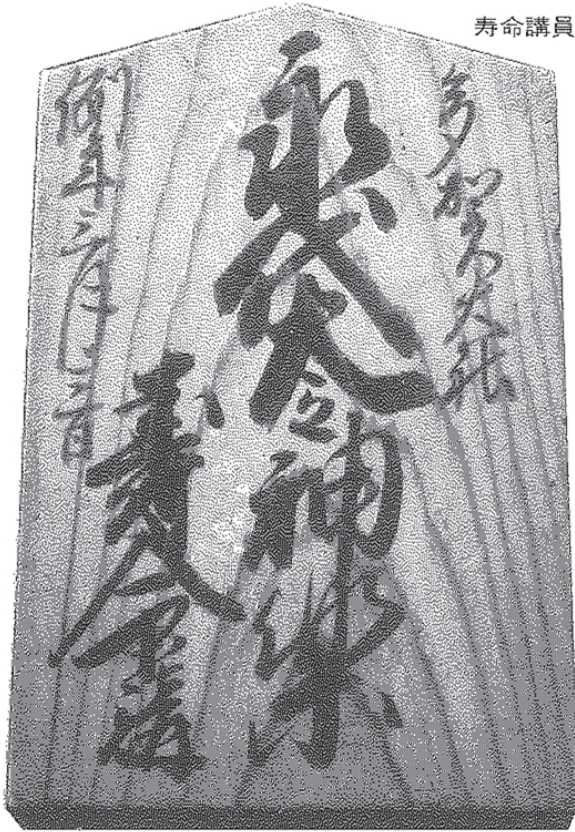
明治元年(1866)『摂州諸檀家人別記』には大阪難波橋より天満—武庫川—芦屋—郡家—神戸—長田—御影—魚崎までの廻る村々の道順が朱書の番号で記され村に入ると昼食を取る家の名前や夜に宿を取る家の名も書留め



坊人が持ち歩いた多賀曼荼羅(江戸時代)

られています。宿を取る家には旅に出る前に多賀よりそれぞれの宿に神社の神符類、お土産の伊吹もぐさ、針、葉等を村全体に配布で

寿命講員札（江戸時代）



表



裏

きる量を予め送っておいて、その宿を基点にしてその村及びその周辺の檀家廻りをするのが常のようであります。毎年同じ道順で同じ時期に訪れていたようであります。何度か繰り返している内に馴染みができて本業の配布活動や加持祈禱の他個人的な悩みごとの相談、または村内の争いごとの調停等も頼まれ、益々信頼されていったものと思われます。

このように坊人と信者が強い絆で結ばれると遠国であっても信者の人達にとっては「お多賀さん」が非常に身近に感じられたのではないかと思われます。各地の村々で気の合った者同志が「多賀講」を結成し、毎年二・三人の代参をお多賀さんへ派遣するようになったのです。その費用は講中の者が毎月掛金を行い資金を作るか、又は共同田の収穫を換金して費用捻出に当たったのです。これが代参人の交通費、旅館代、食費に充当されたのです。

日常生活の中にあっても、病気で困った講員やまとまったお金が要る講員にも講中の総

意で流用されることもしばしばあったようです。多賀講は信者の集団だけでなく講員お互いが助け合う「相合扶助」の精神があったがために全国各地で多賀講が結成されたものと思われます。

今日の多賀大社は時代の変革・社会情勢の変化があり、多賀講議員も横ばいの状態がありますが、それでも10万世帯の講員の方々を核に初詣でを始め年間の参拝者は150万人を計え今もって多賀信仰は連綿と生きつづけております。

滋賀文化財教室シリーズ No.140号

発行年月日 1993年11月25日  
 編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会  
 〒520-21 大津市瀬田南大萱町1732-2  
 TEL(0775)48-9780 FAX(0775)43-1525